様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：３２１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０２１９５

研究課題名（和文）「子育ての社会化」を実現する地域包括支援プログラムの開発とその実践・普及

研究課題名（英文）Development and dissemination of a comprehensive community support program to realize "child-rearing throughout society"

研究代表者
中島　美那子（Nakajima, Minako）

茨城キリスト教大学・文学部・教授

研究者番号：６０５７１２８９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究はこれまで保護者、子育て支援者、地域の大人それぞれに対して別のアプローチのもとに進められてきた「子育てに対する学び」について共通のプログラムを開発することを目的としてきた。方法としてペアレンティング・プログラムの一つである「ノーバディーズ・パーフェクト」および家族療法の一つである「リフレクティング・チーム・アプローチ」を基盤とした地域包括支援プログラムの試行を重ねていった。
結果として、立場が異なる三者に対して同構造のプログラムを実施することが可能であり、参加者間に世代や立場にとらわれない良好な関係性が醸成され、子育てに関する知識や理解の深まりにより客観性・寛容性が高まることが見出された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
まず学術的意義として、「ノーバディーズ・パーフェクト（以下、NPとする）」をさまざまな人々を対象に実施することにより、従来の対象者である就学前の子の保護者と同様の効果が得られることが見出された。さらにNPのセッションを重ねることで相互受容感が醸成され、最終回に実施する「リフレクティング・チーム・アプローチ（以下、RTAとする）」の効果が促進されることが示唆された。また、これまでNPやRTAは対面でのみ実施されてきたが、本研究によりオンラインでの実施も可能となった。
社会的意義としては、本プログラムの実施により、地域全体での子育て力が向上し、世代間交流の促進につながることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to develop a common program for “learning about child-rearing,” which has been promoted under different approaches for parents, child-rearing supporters, and community residents. A comprehensive community support program based on a parenting program, “Nobody's Perfect,” and a family therapy program, the “Reflecting Team Approach,” were tested on various target groups.
We found that it was possible to implement the same structure of the program for three people in different positions, good relationships were created among participants regardless of generation and position, and objectivity and tolerance were increased due to a deeper knowledge and understanding of parenting.

研究分野：子ども学および保育学

キーワード：子育ての社会化　虐待予防　発達支援　ノーバディーズ・パーフェクト　リフレクティング・チーム・アプローチ　地域力　子育て支援

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

家庭内での虐待が増加の一途をたどり、不適切な養育環境にある子どもの存在も相当数あろうことは想像に難くない。今日では子育てが重責とみなされ、保護者へ、特に母親にその責任が重くのしかかる現状があり、我が国は早急にこの状況から脱する必要がある。しかし一方で、保護者とともに子どもの育ちを支える役割として期待する地域住民や地域の支援者にとって、子どもの育ちやその支援の方法について知識を得るための学びの機会が十分にあるとは言い難く、その力を大いに発揮するまでには至っていない。特に地域住民にとって、子育ち・子育てに関する定期的・系統的な学びの機会が提供されることはほとんどなく、あっても講演会が不定期に開催される程度である。地域の重要な相談役である民生委員・児童委員ですらも、十分な研修機会を持つとは言い難いのが現状であり(遠藤,2003)、これではたとえ地域コミュニティで「子育ての社会化」を志向したとしても、どのように子育て家庭を理解し、アプローチして良いのか確信が持てないことになる。

２．研究の目的

このように子どもの育ちを保障する人的環境として保護者、支援者、地域の大人の存在はそれぞれ非常に重要であるにも関わらず、「子育ち・子育てに対する学び」の提供は十分ではなく、その上、これまで三者三様に切り離されて進められてきた経緯もある。しかし、子ども一人ひとりの個性や特徴を受容し、かつその家庭それぞれの多様性や価値観を尊重するという、支える側の基盤となる考え方は三者ともに共通に必要であり、このことからも地域包括的に学びのデザインを捉えることができるはずである。

このような視点を基盤にもつプログラムに「ノーバディーズ・パーフェクト（以下、NP とする)」がある。この NP は、カナダ保健省が就学前の子の保護者対象に支援・教育の目的で開発したものであり、20 人以内で 6～8 回程度連続で実施する参加者主体の構造化されたプログラムである。子育ての方法を一方的に教えることよりも参加者の多様な価値観に基づく子育てを尊重することに主眼が置かれている。また、集団の力を活用したグループワークに「リフレクティング・チーム・アプローチ（以下、RTA とする)」がある。もとは Andersen(1995)が開発した家族療法であり、チームの話し合いが活発になり、相談者の内省力・熟考力が活性化されることが知られている。木村ら(2018)は研修施行を重ねて、この NP と RTA を組み合わせた保育者の園内研修プログラムを開発し、実施により組織内の同僚性が深まり、保育の質が向上することを見出している。

そこで本研究では、NP と RTA を取り入れた「子育ち・子育てに対する学び」に関する地域包括的な研修プログラムを開発することとした。そのプログラムは、保護者・支援者・地域住民に共通の形式で提供することができ、参加者みなが自主的に参加したいと思えるような個人にとっても価値ある居心地の良いプログラムとすることを目指した。さらには、プログラムの構造の簡易化を進め、誰でも本プログラムのファシリテーター（以下 Fa とする）となることができるようにデザインし、これまでの参加者が修了後には Fa となり、地域に普及する役割を担うことも視野に入れた。

３．研究の方法

研修プログラムの試行を重ね、その効果的なあり方を検討するとともに、事前事後の変化

および効果を検証した。その具体的調査方法としては、研修プログラムをすべて録音し、終了後に逐語録を作成してその内容の分析を行った。また事前事後に質問紙を実施してその変化について調査した。

研修プログラムの試行数としては、子が幼稚園へ在籍する子育て当事者（母親）のグループ１試行、子育て当事者ではあるが特別支援学校の PTA である父母のグループ 4 試行、子育て支援施設の支援員のみのグループ 2 試行、地域住民のグループ 3 試行、地域住民と子育て当事者の混合グループ１試行、養育里親と里親支援に関連する専門職員との混合グループ２試行の合計 13 試行である。プログラムは１試行につき原則 4、5 回の連続講座として実施し、開催回数に関しても検討した。

すでに木村ら(2018)は、保育者の園内研修に対して本プログラムの原型となるプログラムを用いる研究をしており、その有益性は実証されている。しかしさらに保護者や地域の人々にとっても有益であり、共通に用いることのできるプログラムとするために、テーマの決定方法、資料の使用方法等について試行を重ねた。なかでもテーマには子育てに工夫が必要とされる発達の偏り・障害について、支援のあり方に困難さを要する虐待について、といったトピックを入れ、これらの学びを深める資料(テキスト等)の選定も慎重に行うこととした。

そしてもう一つの研究の方向性として、本プログラム修了者の中から希望者を募り、Fa を養成する講座を開催し、実際に本プログラムの普及、定着を図ることも進めた。

４．研究成果

研究の成果については、次の二つに分けて整理することとする。一つが、NP のエッセンスを取り入れることによる成果であり、もう一つが NP に拠らない本研修プログラム独自の成果である。

(1)　NP のエッセンスを取り入れることによる成果

①　心理的安全性

まず NP のエッセンスを取り入れることによるプログラムの成果についてだが、先に本研修プログラムの特徴について触れたい。以下の図に示すように本プログラムは、「安心できる場の確保」を目的に大きく６つの特徴を有する。これらのうちの「分かりやすい資料の活用」以外の５つは、NP 自体に備わる特徴である。本プログラムに見られた NP の構造上の特徴からくる効果として、「心理的安全性」が挙げられる。図にある「多様な価値観の尊重」を基盤として、誰もが安心していられる場とするための「ルール作り」を行い、リラックスして参加できる場とするために「アイスブレイク」を実施することが NP の特徴であり、本プログラムでも必ず取り入れてきたものである。このように本プログラムでは、心理的に安全な場を構造化することで、さらに参加者それぞれが心理的安全性を補強しあう姿が見られ、このことがプログラム参加者の心理的距離感を縮め、ディスカッションが活発化することへと影響した。このことは、直接的に「安心して会に参加できる」といった発言が非常に目立ったこと、あるいは自ら笑い（ユーモア）を提供する参加者が多くいたこと、失敗談や辛かった経験を躊躇なく話すようになる参加者が増えたこと等、他者の

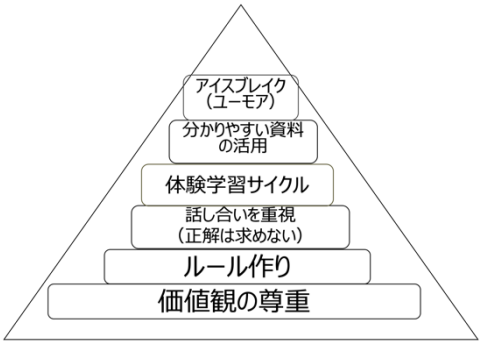

図　プログラムの特徴

安心につながったり、和んだりすることにつながるエピソードが数多く確認されたことからも明らかである。

② 相互の共感性や他者への受容感の醸成

２つ目の NP のエッセンスを取り入れることによるプログラムの成果は、相互の共感性や他者への受容感の醸成である。本プログラムの参加者が互いに共感し合い、次第に受容し合う関係性を育むことが多くのエピソードから明らかとなった。例えば、ある子育ての当事者（保護者）が自分の子育ての失敗談を開示すると、それに対して他の参加者みなが次々と受容的、共感的にコメントをする場面が多く見られ、それはまた、次への共感や受容へとつながっていった。この 2 つ目の効果は、①で示した心理的な安心感が確保されたからこそ醸成されたものであり、効果の好循環が認められた。

③ 捉え方、考え方への客観性の高まり、視野の広がり

最後に NP のエッセンスを取り入れることによるプログラムの成果として挙げられるのは、各自の捉え方、考え方への客観性の高まり、視野の広がりである。②で示したように、本プログラムの中では、自らのエピソードを語る参加者に対して、みなが活発にコメントや意見を寄せる。それらの対話を通して、参加者それぞれが自らの子育てについて、あるいは地域や社会の中での子どもの育ち・子育てについて、これまでの自分自身の考え方に影響を与えることが認められた。それは、プログラム中の参加者の発言、そしてプログラム修了後の質問紙調査から、会に参加して自分の考え方が変わったとする者が大多数となったことからも明らとなった。

（2）NP に拠らない本研修プログラム独自の成果

① 資料を用いることによる客観性の担保

NP にはない本プログラム独自の方法として、それぞれのテーマに基づいた資料を活用することが挙げられる。NP でも子育て全般に関するテキストは用いるが、テーマは参加者が決めることとなっていることから、テキストはあくまでも補助的に用いる。しかし本プログラムでは、あらかじめテーマを設定し、そのテーマに基づいたわかりやすく、誰もが入手しやすい資料を必ず用いることとし、まずはその資料をデスカッションの手がかりとしている。特に保護者として、また地域住民としての立場で参加する人々にとって、子どもを取り巻く今日的課題についての知識を得ることで、その後のディスカッションに客観的な見方が加わったり、興味が増して質問が多く飛び交ったりすることが認められた。

② オンラインによる実施

今回、コロナウィルス感染症による社会的な制約があり、対面での実施が困難となる時期があり、余儀なくオンラインでの実施を試みた。13 回の試行のうち 3 回ではあったものの、いずれも対面と違わない内容を行うことができた。質問紙調査においても対面での試行との差は見られなかった。また、RTA も少しの工夫を要するものの、大きな問題はなくオンラインで実施できることがわかった。

今回の参加者の中には遠方からの参加者も存在し、オンラインならではの利点を活かすことができ、今後も本プログラムのオンライン実施が可能なことが示唆された。

③ RTA の効果的実施

これまで RTA は医療や相談機関を中心に実施されており、その効果も明らかとなっている(三澤,2008:矢原,2008)。近年では他のさまざまな場での応用も進められているが、子どもの育ち・子育てに関する研修プログラムへの応用は現在のところ本研究のみであり、今回その実施の効果が大きいことが認められた。RTA ではその構造上、外的な対話と内的な対話

が繰り返されることにより内省が進むとされ、また互いに観察し合う中で自分自身を客観視することができるようになるとされる。本プログラムの場合、先に NP の形式で会が進むことから、最終回の RTA へと向かうまでに、すでに参加者には物事への客観的見方、視野の広がりが育まれつつある。そのため RTA においても活発なやり取りがあり、参加者それぞれから多様な視点も提示され、RTA が参加者にとって満足のいくものとなっていったことが分かる。

④ 多様な背景をもつ参加者同士の複層的な交流

研究開始当初は、それぞれ保護者のみ、地域住民のみ、支援者のみのグループを対象とする計画であった。しかし実際には、「保護者と地域住民」および「保護者(里親)と支援者」という背景の異なる者たちの混合グループに対しての試行も行い、大いに成果が見出された。例えば、保護者と地域住民のグループの場合、地域住民の立場の者たちは、子育て中の母親への共感を多く口にし、保護者の立場の参加者は、そのような発言に対して異なる世代に対する温かさを感じ、心理的距離の近さを感じると表明したことから、世代間の良い交流が生まれた。また、里親とその里親を支援する者で構成されたグループは、次第に「支援する・支援される」という縦の関係が薄れ、水平の関係性が構築される様子が見てとれた。近年、里親とその支援者との間での「チーム養育」が着目されるなか、本プログラムを経ることによるチーム養育の実現可能性が示唆された。

⑤ 参加者が自立的に地域でプログラムを実践する可能性の広がり

本研究では研修プログラムの開発のみで研究を閉じるのではなく、その後の普及も視野に入れた。そのためにプログラム構造の簡易化を図り、誰でも Fa となることができるようにデザインした。実際に Fa 養成講座を研究期間内に合計 3 回実施し、その後それぞれの地域で受講者が Fa となり、プログラムを実践するに至った。そこで 5 つ目の成果として、研修プログラムの受講後さらに Fa 養成講座を経た参加者らが各地域で自立的に本プログラムを実践し、普及していく可能性が見出されたことを挙げたい。

最後に、今回の参加者の多くは客観性や広い視野をもつこと、そして心理的に安全な場の重要性を自らの体験とともに理解していることから、今後地域の子どもの育ちに関するエンパワリング・リーダーや保護者（里親含む）のメンターとなり得る可能性がある。このように本研修プログラムが地域のリーダーやメンターを生み出し、地域の子どもの育ちに大いに貢献できる可能性が見出されたことを加筆しておく。

引用文献

Andersen.T (1995)The Reflecting Team: Dialogues and Dialogues About the Dialogues. W W Norton & Co Inc

遠藤和佳子(2003)民生委員・児童委員の現状と課題ー児童虐待への取り組みを中心としてー.関西福祉科学大学紀要,6,93-109

三澤文紀(2008)リフレクティング・プロセスのコミュニケーションに関する研究.茨城キリスト教大学紀要.12.257-268.

木村由希・神永直美・中島美那子(2018)ノーバディーズ・パーフェクト・プログラムを用いた園内研修プログラムの検討‐アウトリーチ型参加者対象プログラムの実施から‐.茨城大学教育実践研究

矢原隆行(2008)会話についての会話と観察の観察.人間科学共生社会学 6.59-71.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 安藤みゆき	４．巻 27(1)
２．論文標題 社会的養護自立支援制度の転換期における課題	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本精神衛生学会誌「こころの健康」	６．最初と最後の頁 43-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 平田正吾・奥住秀之	４．巻 19
２．論文標題 知的障害概念についてのノート（２）－境界知能の現在－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東京学芸大学教育実践研究紀要	６．最初と最後の頁 99-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中島 美那子・田所悠・安保里紗・斎藤明奈・小坂部玲奈	４．巻 18(2)
２．論文標題 特別支援学校保護者相互支援の交流プログラムの効果－横だけでなく縦にもつながった５年間の歩み－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 臨床発達心理実践研究	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Hirata Shogo、Kita Yosuke、Suzuki Kota、Kitamura Yuzuki、Okuzumi Hideyuki、Kokubun Mitsuru	４．巻 6
２．論文標題 Motor Ability and Mental Health of Young Children: A Longitudinal Study	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Frontiers in Education	６．最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/feduc.2021.725954	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐藤環・小川哲哉・神永直美	4．巻 1
2．論文標題 幼児期における言葉の発達ー絵本の読み聞かせに関する一考察－	5．発行年 2021年
3．雑誌名 茨城大学全学教職センター研究報告	6．最初と最後の頁 39-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 菅野ひろみ・中島美那子・佐藤美年子	4．巻 54
2．論文標題 子育て支援による学生の学び －深い学びを促進する現場での実践的研修－	5．発行年 2020年
3．雑誌名 茨城キリスト教大学紀要 II.社会・自然科学	6．最初と最後の頁 181-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 中島美那子・安藤みゆき・片根志雄・木村由希・神永直美
2．発表標題 チーム養育を推進する研修プログラムの開発－里親、里親支援専門相談員が真のチームとなるために－
3．学会等名 日本子ども虐待防止学会第28回学術集会
4．発表年 2022年

1．発表者名 中島美那子
2．発表標題 高齢期のより良いライフスタイルとは－日本にルーツをもつハワイ女性たちの暮らしを例に－
3．学会等名 日本臨床発達心理士会第18回全国大会
4．発表年 2022年

１．発表者名 中島美那子
２．発表標題 保護者同士の縦と横のつながり－特別支援学校PTA「ツナイデコウ」の取り組み－
３．学会等名 日本臨床発達心理士会第17回全国大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 木村由希・中島美那子・神永直美
２．発表標題 園内研修におけるリフレクティングチームアプローチの可能性
３．学会等名 日本保育学会第74回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 安藤みゆき・細川梢・片根志雄・中島美那子
２．発表標題 里親のチーム養育に対するニーズと課題
３．学会等名 日本子ども虐待防止学会第27回学術集会かながわ大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 眞﨑由香・中島美那子
２．発表標題 地域母子保健事業の挑戦－フォローアップ調査から見た30分の親支援プログラム「どれみプログラム」の効果－
３．学会等名 第68回日本小児保健協会学術集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 中島美那子・木村由希・神永直美・安藤みゆき
２．発表標題 「子育ての社会化」を実現する地域包括研修プログラムの開発（1）－支援者・保護者・地域での実践課題－
３．学会等名 日本子ども虐待防止学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 神永直美・中島美那子・木村由希
２．発表標題 中堅保育者のための園内研修ファシリテーターの養成 - 研修プログラムの一環として -
３．学会等名 日本保育者養成教育学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 中島美那子、塩原慶子	４．発行年 2022年
２．出版社 溪水社	５．総ページ数 288
３．書名 地域に生きる女性たち	

１．著者名 國分充，平田正吾編著	４．発行年 2020年
２．出版社 福村出版	５．総ページ数 176
３．書名 知的障害・発達障害における「行為」の心理学 ： ソヴィエト心理学の視座と特別支援教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

1．中島美那子（２０２２）子育てを社会にひらく－地域に向けた包括的プログラムの開発とその展開－．地域ケアリング.24(11)52-53.
2．木村由希・神永直美・中島美那子・安藤みゆき（２０２２）仲間とつながり対話が深まる ファシリテーターのためのハンドブック．（ファシリテーター養成講座のテキストとする目的で報告書を作成）

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	神永　直美 (Kaminaga Naomi) (20435225)	茨城大学・教育学部・教授 (12101)	
研究分担者	木村　由希 (Kimura Yuki) (90446146)	常磐短期大学・幼児教育保育学科・准教授 (42104)	
研究分担者	安藤　みゆき (Ando Miyuki) (90612797)	茨城女子短期大学・その他部局等・教授 (42102)	
研究分担者	平田　正吾 (Hirata Shogo) (10721772)	東京学芸大学・教育学部・准教授 (12604)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関